

踊る一寸法師

江戸川乱歩

青空文庫

「オイ、緑さん、何をぼんやりしてるんだな。ここへ来て、お前も一杯御相伴にあずかんねえ」

肉襦袢の上に、紫繻子に金糸でふち取りをした猿股をはいた男が、鏡を抜いた酒樽の前に立ちはだかつて、妙に優しい声で云った。

その調子が、何となく意味あり気だったので、酒に氣をとられていた、一座の男女が一齐に緑さんの方を見た。

舞台の隅の、丸太の柱によりかかって、遠くの方から同僚達の酒宴の様子を眺めていた一寸法師の緑さんは、そう云われると、いつもの通り、さもさも好人物らしく、大きな口を曲げて、ニヤニヤと笑った。

「おらあ、酒は駄目なんだよ」

それを聞くと、少し酔の廻った軽業師達は、面白そうに声を出して笑った。男達の鹽辛声と、肥った女共の甲高い声とが、広いテント張りの中に反響した。

「お前の下戸は云わなくなつたつて分つてるよ。だが、今日は特別じゃねえか。大当りのお祝いだ。何ほ不具者だつて、そうつき合いを悪くするものじゃねえ」

紫繻子の猿股が、もう一度優しく繰返した。色の黒い、脣の厚い、四十恰好の巖乗な男だ。

「おらあ、酒は駄目なんだよ」

やつぱりニヤニヤ笑いながら、一寸法師が答えた。十一二歳の子供の胴体に、三十男の顔をくつつけた様な怪物だ。頭の鉢が補助の様に開いて、らつきよう型の顔には、蜘蛛が足を拵げた様な、深い皺と、キヨロリとした大きな眼と、丸い鼻と、笑う時には耳までさけるのではないかと思われる大きな口と、そして、鼻の下の薄黒い無精髻とが、不調和についていた。青白い顔に脣だけが妙に真赤だった。

「緑さん、私のお酌なら、受けて呉れるわね」

美人玉乗りのお花が、酒の為に赤くほてった顔に、微笑を浮べて、さも自信ありげに口を入れた。村中の評判になった、このお花の名前は、私も覚えていた。

一寸法師は、お花に正面から見つめられて、一寸たじろいだ。彼の顔には一刹那不思議な表情が現れた。あれが怪物の羞恥であろうか。併し、暫くもじもじしたあとで、彼はやつぱり同じことを繰返した。

「おらあ、酒は駄目なんだよ」

顔は相変わらず笑っていたが、それは咽喉のどにひっかかった様な、低い声だった。

「そう云わないで、まあ一杯やんなよ」

紫繻子の猿股は、ノコノコと歩いて行って、一寸法師の手を取った。

「さあ、こうしたら、もう逃がしっこないぞ」

彼は、そう云って、グングンその手を引っぱった。

巧みな道化役者にも似合わない、豆蔵の緑さんは、十八の娘の様に、併し不気味な嬌きよう差しゆうを示して、その柱につかまったらま動こうともしない。

「止せたら、止せたら」

それを無理に紫繻子が引張るので、その度たびに、つかまっている柱が撓しなって、テント張りの小屋全体が、大風の様にゆれ、アセチリン瓦斯ガスの釣つりランプが、鞆ぶらんこの様に動いた。

私は何となく気味が悪かった。執拗しつように丸太の柱につかまっている一寸法師と、それを又依怙いこじ地に引きはなそうとしている紫繻子、その光景に一種不気味な前兆が感じられた。

「花ちゃん、豆蔵のことなぞどうだっというから、サア、一つお歌いよ。ねえ。お囃はやしさ
ん」

気がつくど、私のすぐ側そばで、八字髭はちじひげをはやして、その癖妙くせににやけた口を利きく、手品

使いの男が、しきりとお花に勧めていた。新米らしいお囃しのおばさんは、これもやっぱり酔っぱらっていて、猥褻に笑いながら、調子を合せた。

「お花さん、歌うといいわ。騒ぎましようよ。今晚は一つ、思いきり騒ぎましようよ」
「よし、俺が騒ぎ道具を持って来よう」

若い軽業師が、彼も肉襦袢一枚で、いきなり立上って、まだ争っている一寸法師と紫繻子の側を通り越して、丸太を組合せて作った二階の楽屋へ走って行った。

その楽器の来るのも待たないで、八字髭の手品使いは、酒樽のふちを叩きながら、胴間声をはり上げて、三曲万歳を歌い出した。玉乗娘の二三が、ふざけた声で、それに和した。そういう場合、いつも槍玉に上るのは一寸法師の緑さんだった。下品な調子で彼を読込んだ万歳節が、次から次へと歌われた。

てんでんに話し合ったり、ふざけ合ったりしていた連中が、段々その歌の調子に引き入れられて、遂には全員の合唱となった。気がつかぬ間に、さっきの若い軽業師が持って来たのであろう、三味線、鼓、鉦、拍子木などの伴奏が入っていた。耳を聳せんばかりの、不思議なる一大交響樂が、テントをゆるがした。歌詞の句切り句切りには、恐しい怒号と拍手が起った。男も女も、酔が廻るにつれて、漸次狂的にはしやぎ廻った。

その中で、一寸法師と紫繻子は、まだ争いつづけていた。緑さんはもう丸太を離れて、エヘエへ笑いながら、小猿の様に逃げ廻っていた。そうなると彼はなかなか敏捷だった。大男の紫繻子は、低能の一寸法師に馬鹿にされて、少々癩癩を起していた。

「この豆蔵奴、今に、吠面かくな」

彼はそんな威嚇の言葉を怒鳴りながら追っかけた。

「御免よ、御免よ」

三十面の一寸法師は、小学生の様に、真剣に逃げ廻っていた。彼は、紫繻子とつつかまって、酒樽の中へ首を押しつけられるのが、どんなにか恐しかったのであろう。

その光景は、不思議にも私にカルメンの殺し場を思出させた、闘牛場から聞えて来る、狂暴な音楽と喊声につれて、追いつ追われつしている、ホセとカルメン、どうした訳か、多分服装のせいであつたらう、私はそれを聯想した。一寸法師は真赤な道化役の衣裳をつけていた。それを、肉襦袢の紫繻子が追っかけるのだ。三味線と鉦と鼓と拍子木が、そして、やけくそな三曲万歳が、それを囃し立てるのだ。

「サア、とつつかまえたぞ、こん畜生」

遂に紫繻子が喊声を上げた。可哀相な緑さんは、彼の巖乗な両手の中で、青くなつて

ふるえていた。

「どいた、どいた」

彼はもがく一寸法師を頭の上にさし上げて、こちらへやって来た。皆は歌うのを止めて、その方を見た。二人の荒々しい鼻息が聞えた。

アツと思う間に、真逆様まっさかさまにつり下げられた一寸法師の頭が、ザブツと酒樽の中に漬つた。緑さんの短い両手が、空に藻もがいた。パチャパチャと酒のしぶきが飛び散つた。

紅白段だんだら染ぞめの肉襦袢や、肉色の肉襦袢や、或は半裸体の男女が、互たがに手を組み膝ひざを合せて、ゲラゲラ笑いながら見物していた。誰もこの残酷な遊戯を止めようとはしなかった。存分酒を飲まされた一寸法師は、やがて、そこへ横よこ様に抛り出された。彼は丸くなつて、百日咳ひやくにちげきの様に咳入せきいつた。口から鼻から耳から、黄色い液体がほとばしつた。彼のこの苦悶くもんを囁ささす様に、又しても三曲万歳の合唱が始つた。聞くに耐えぬ罵詈譎ばりぎんぼうが繰返された。

一しきり咳入せきいつた後は、ぐつたりと死骸よこたの様に横わっている一寸法師の上を、肉襦袢のお花が、踊り廻つた。肉つきのいい彼女の足が、屢々しばしば彼の頭の上を跨またいだ。

拍手と喊声と、拍子木の音とが、耳を聳もはするばかりに続けられた。最早もはやそこには、一人

として正気な者はいなかった。誰も彼も狂者の様に怒鳴った。お花は、早調子の万歳節に合わせて、狂暴なジプシー踊りを踊りつづけた。

一寸法師の緑さんは、やつと目を開くことが出来た。不気味な顔が、猩々しやうじやうの様に真赤になっていた。彼は肩息かたいきをしながら、ヒヨロヒヨロと立上ろうとした。と、丁度その時、踊り疲れた玉乗女の大きなお尻が、彼の目の前に漂って来た。そして、故意か偶然か、彼女は一寸法師の顔の上へ尻餅をついてしまった。

仰向きあおむきにおしつぶされた緑さんは、苦し相そうなうめき声を立てて、お花のお尻の下で藻がいた。酔っぱらったお花は、緑さんの頭の上で馬乗りの真似をした。三味線の調子に合せ、「ハイ、ハイ」とかけ声をしながら、平手でピシャピシャと緑さんの頬を叩いた。一同の口から馬鹿笑いが破裂した。けたたましい拍手が起った。だが、その時緑さんは、大きな肉塊の下じきになって、息も出来ず、半死半生の苦みくるしみをなめていたのだ。

暫くしてやつと許された一寸法師は、やっぱりニヤニヤと、愚おろかな笑いを浮べて、半身を起した。そして、常談じやうだんの様な調子で、

「ひでえなあ」

とつぶやいたばかりだった。

「オー、鞠^{まり}投げをやるうじやねえか」

突然、鉄^{かなぼう}棒の巧みな青年が立上つて叫んだ。皆が「鞠^{まり}投げ」の意味を熟知している様子だった。

「よかろう」

一人の軽業師が答えた。

「よせよ、よせよ、あんまり可哀相だよ」

八字髭の手使いが、見兼ねた様に口を入れた。彼^だ丈^だけは、綿^{めん}ネルの背広を着て、赤いネクタイを結んでいた。

「サア、鞠^{まり}投げだ、鞠^{まり}投げだ」

手品使いの言葉なんか耳にもかけず、彼の青年は一寸法師の方へ^{ちかづ}近い^かで行った。

「オイ、緑さん始めるぜ」

そういうが早い^いか、青年は不具者を引っぱり起して、その眉^{みけん}間^{かん}を平手でグンとついた。一寸法師は、つかれた勢^{いきおい}で、さも鞠^{まり}の様にクルクル廻りながら、後^{うしろ}の方^{かた}へよろけて行った。すると、そこにもう一人の青年がいて、これを受けとめ、不具者の肩^{かた}を掴^{つか}んで自分の方へ向けると、又グンと額^{ひたい}をついた。可哀相な緑さんは、再びグルグル廻りながら前の青年の

所へ戻つて来た。それから、この不思議な、残忍なキャッチボールが、いつまでもくり返された。

いつの間にか、合唱は出雲拳の節に変わっていた。拍子木と三味線が、やけに鳴らされた。フラフラになった不具者は、執念深い微笑を以て、彼の不思議な役目を続けていた。

「もうそんな下らない真似はよせ。これからみんなで芸づくしをやろうじゃないか」

不具者の虐待に飽きた誰かが叫んだ。

無意味な怒号と狂気のような拍手が、それに答えた。

「持ち芸じゃ駄目だぞ。みんな、隠し芸を出すのだ。いいか」

紫繻子の猿股が、命令的に怒鳴った。

「まず、皮切りは緑さんからだ」

誰かが意地悪くそれに和した。ドツと拍手が起った。疲れ切つて、そこに倒れていた緑さんは、この乱暴な提議をも、底知れぬ笑顔で受けた。彼の不気味な顔は泣くべき時にも、笑った。

「それならいいことがあるわ」真赤に酔っぱらった美人玉乗りのお花が、フラフラと立上つて叫んだ。

「豆ちゃん。お前。髭さんの大魔術をやるといいわ。一寸^{すん}だめし五分^ぶだめし、美人の獄^{ごくも}門^んてえのを、ね、いいだろ。おやりよ」

「エへへへへ」不具者は、お花の顔を見つめて笑った。無理に飲まされた酒で、彼の目は妙にドロンとしていた。

「ね、豆ちゃんは、あたいに惚^ほれてるんだね。だから、あたいのいいつけなら、何^なんだつて聞^きくだろ。あたいがあの箱の中へ這^{はい}入^いつてあげるわ。それでもいやかい」

「ヨウヨウ、一寸法師の色男！」

又しても、破れる様な拍手と、笑^{しょうせい}声^{こゑ}。

豆蔵とお花、美人獄門の大魔術、この不思議な取合せが、酔っばらい共を喜ばせた。大勢が乱れた足どりで、大魔術の道具立てを始めた。舞台の正面と左右に黒い幕がおろされた。床には黒い敷物^{しきもの}がしかれた。そして、その前に、棺桶^{かんおけ}の様な木箱と、一箇のテールが持出された。

「サア、始まり始まり」

三味線と鉦と拍子木が、お極^{きま}りの前奏曲を始めた。その囃^はしに送り出されて、お花と、彼女に引立てられた不具者とが、正面に現れた。お花はピッタリ身についた肉色のシャツ

一枚だった。緑さんはダブダブの赤い道化服をつけていた。そして、彼の方は、相も変らず、大きな口でニヤリニヤリと笑っていた。

「口上を云うんだよ、口上を」

誰かが怒鳴った。

「困るな、困っちまうな」

一寸法師は、ぶつぶつそんなことをつぶやきながら、それでも、何だか喋り始めた。

「エー、ここもと御覽に供しまするは、神変不思議の大魔術、美人の獄門とござりまして、これなる少女をかたえの箱の中へ入れ、十四本の日本刀をもちまして、一寸だめし、五分だめし、四方八方より田楽刺しと致すのでござります。エーと、が、そのみにては御慰みが薄い様にござります。か様に斬りさいなみましたる少女の首を、ザツクリ、切断致し、これなるテーブルの上に、晒し首とござあい。ハッ」

「あぎやかあぎやか」「そつくりだ」賞讃とも擲揄ともつかぬ呼声が、やけくそな拍手に混って聞えた。

白痴の様に見える一寸法師だけれど、流石に商売柄、舞台の口上はうまいものだ。いつも八字髭の手品使いがやるのと、口調から文句から、寸分違わない。

やがて、美人玉乗りのお花は、あでやかに一寸掛して、しなやかな身体を、その棺桶様の箱の中へ隠した。一寸法師はそれに蓋をして、大きな錠前を卸した。

一束の日本刀がそこに投げ出されてあつた。緑さんは、一本、一本、それを拾い、一度ずつ床につき立てて、偽物でないことを示した上、箱の前後左右に開けられた小さな孔へ、つき通して行つた。一刀毎に、箱の中から物凄い悲鳴が——毎日見物達を戦慄させたあの悲鳴が——聞えて来た。

「キヤー、助けて、助けて、助けて、アレー、こん畜生、こん畜生、こいつは本当に私を殺す気だよ。アレー、助けて、助けて、助けて………」

「ワハハハハハハ」 「あぎやかあぎやか」 「そっくりだ」 見物達は大喜びで、てんでんに怒鳴つたり、手をたたいたりした。

一本、二本、三本、刀の数は段々増して行つた。

「今こそ思い知つたか、このすべた奴」一寸法師は芝居がかりで始めた。「よくもよくもこの俺を馬鹿にしたな。不具者の一念が分つたか、分つたか、分つたか」

「アレー、アレー、助けて、助けて、助けて——」

そして、田楽刺しにされた箱が、生あるものの様に、ガタガタと動いた。

見物達は、この真に迫った演出に夢中になった。百雷の様な拍手が続いた。

そして、遂に十四本目の一刀がつきさされた。お花の悲鳴は、さも瀕死ひんしの怪我けが人の様なうめき声に変わって行つた。最早文句をなさぬヒーヒーという音であつた。やがて、それも絶え入るい様に消えて了うと、今迄まで動いていた箱がピツタリと静止した。

一寸法師はゼイゼイと肩で呼吸をしながら、その箱を見つめていた。彼の額は、水に漬つた様に、汗でぬれていた。彼はいつまでもいつまでも、そうしたまま動かかなかつた。

見物達も妙に黙り込んだ。死んだ様な沈黙を破るものは、酒の為に烈しくなつた、皆の息づかいばかりだつた。

暫くすると、緑さんは、そろりそろりと、用意のダンビラを拾い上げた。それは青龍せいりゆう刀とうの様にギザギザのついた、幅の広い刀だつた。彼はそれを、も一度床につき立てて、切れ味を示したのち、さて、錠前はすを脱して、箱の蓋を開けた。そして、その中へ件くだんの青龍刀を突込むと、さも本当に人間の首を切る様な、ゴリゴリという音をさせた。

それから、切つて了つた見得みえで、ダンビラを投げ出すと、何物かを袖そでで隠して、かたえのテーブルの所まで行き、ドサツという音を立てて、それを卓上に置いた。

彼が袖をのけると、お花の青ざめた生首が現れた。切り口の所からは真赤な生々しい血ち

潮が流れ出していた。それが紅のとき汁だなどは、誰にも考えられなかった。

氷の様に冷いものが私の背中を伝つて、スーッと頭のとつぺんまで駆け上った。私は、そのテーブルの下には二枚の鏡が直角にはりつめてあつて、その背後に、床下の抜け道をくぐつて来た、お花の胴体があることを知っていた。こんなものは大して珍しい手品ではなかった。それにも拘らず、私のこの恐しい予感はどうしたものであろう、それは、いつもの柔和な手品使と違つて、あの不具者の、不気味な容貌の為であらうか。

まつ黒な背景の中に、緋の衣の様な、真赤な道化服を着た一寸法師が、大の字に立ちはだかつていた。その足許には血糊のついたダンビラが転っていた。彼は見物達の方を向いて、声のない、顔一杯の笑いを笑っていた。……だが、あの幽な物音は一体何であらう。それは若しや、真白にむき出した、不具者の歯と歯がカチ合う音ではないだらうか。

見物達は、依然として鳴りをひそめていた。そして、お互が、まるで恐いものでも見る様に、お互の顔をぬすみ見ていた。やがて、例の紫繻子がヌツクと立上った。そして、テーブル目がけて、ツカツカと二三歩進んだ。流石にじつとしていられなかったのだ。

「ホホホホホホホ」

突然晴々しい女の笑声が起つた。

「豆ちゃん味をやるわね。ホホホホホホ」

それは云うまでもなくお花の声であった。彼女の青ざめた首が、テーブルの上で笑ったのだった。

その首を、一寸法師はいきなり又、袖で隠した。そして、ツカツカと黒幕のうしろへ這入って行った。跡には、からくり仕掛けのテーブルだけが残っていた。

見物人達は、余りに見事な不具者の演戯に、暫くはため息をつくばかりだった。当の用品使いさえもが、目をみはつて、声を呑んでいた。が、やがて、ワーツというときの声が、小屋をゆすつた。

「胴上げだ、胴上げだ」

誰かが、そう叫ぶと、彼等は一団になって、黒幕のうしろへ突進した。泥酔者達は、その拍子ひょうしに足をとられて、バタバタと、折重つて倒れた。その内のある者は、起上つて、又ヒョロヒョロと走つた。空になつた酒樽のまわりには、已すでに寐入ねつて了つた者共が、魚う河岸おがしの鮪まぐろの様に取残されていた。

「オーイ、緑さーん」

黒幕のうしろから、誰かの呼び声が聞えて来た。

「緑さん、隠れなくつてもいいよ。出るよ」

又誰かが叫んだ。

「お花姉さあん」

女の声と呼んだ。

返事は聞えなかった。

私は云い難き恐怖に戦った。さつきのは、あれは本物のお花の笑声だったのか。若しや、奥底の知れぬ不具者が、床の仕掛けをふさいで真実彼女を刺し殺し、獄門に晒したのではないか。そして、あの声は、あれは死人の声ではなかったのか、愚なる軽業師共は、彼の八人芸と称する魔術を知らないのであろうか。口をつぐんだまま、腹中で発音して死物に物を云わせる、あの八人芸という不思議な術を。それを、あの怪物が習い覚えていなかったと、どうして断定出来るであろう。

ふと気がつくと、テントの中に薄い煙が充ち充ちていた。軽業師達の煙草の煙にしては、少し変だった。ハツとした私は、いきなり見物席の隅の方へ飛んで行った。

案の定、テントの裾を、赤黒い火焰が、メラメラと嘗めていた。火は已にテントの四周

を取りまいている様子だった。

私は、やつとのもので燃える帆布ほぬのをくぐつて、外の広っぱへ出た。広々とした草原くさはらには、白い月光が、隈くまもなく降りそそいでいた。私は足にまかせて近くの人家へと走った。

振り返ると、テントは最早や三分の一まで、燃え上っていた。無論、丸太の足場や、見物席の板にも火が移っていた。

「ワハハハハハハハハ」

何がおかしいのか、その火焰の中で、酔いしれた軽業師達が狂気のように笑う声が、遙はるかに聞えて来た。

何者であろう、テントの近くの丘の上で、子供の様な人影が、目を背にして踊っていた。彼は西瓜すいかに似た丸いものを、提ちようちん灯の様んにぶら下げて、踊り狂っていた。

私は、余りの恐しさに、そこへ立たちすくんで、不思議な黒影を見つめた。

男は、さげていた丸いものを、両手で彼の口の所へ持つて行った。そして、地じだんだを踏みながら、その西瓜の様なものに食いついた。彼はそれを、離はなしては喰いつき、離しては喰いつき、さも楽しげに踊りつづけた。

水の様な月光が、変化踊へんげおどりの影法師を、真黒に浮き上らせていた。男の手にある丸い物から、そして彼自身の脣から、濃厚な、黒い液体が、ボトリボトリと垂れているのさえ、はつきりと見分けられた。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版印刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第二巻 屋根裏の散歩者」春陽堂

1926（大正15）年1月

初出：「新青年」博文館

1926（大正15）年1月

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：門田裕志

2017年4月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

踊る一寸法師

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>